

渥美郡三町の時代



郷土史編さん室 ☎36局6503

水田灌漑から畑地灌漑へ
転換された豊川用水計画

宇連ダム着工以来19年の歳月と488億円を投じた豊川用水が昭和43年に完成しました。

豊川用水事業とともに、渥美半島全域で農業基盤整備を中心とする農業の近代化が図られ、渥美郡は日本有数の施設園芸・畑作農業地帯へと発展してきました。

大正10年、鳳来寺山にため池を造り、渥美半島まで豊川の水を引くことを提唱し、実現に向けて尽力したのが、赤羽根村高松出身の先覚者・



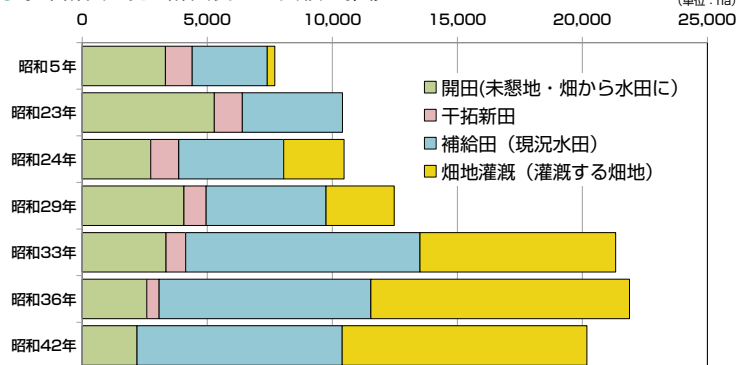
●愛知県渥美八名二郡大規模開墾計画地区平面図

(『豊川用水史 資料編』付図に水路を着色)

近藤寿市郎氏でした。

右の地図は、昭和5年に農林省が作成したものです。東高西低、南高北低という渥美半島特有の台地地形を生かして、先端部まで自然流下で水を送る構想は、この時、既にできあがっていました。幹線水路は、太平洋岸を高松まで通し、その先は、半島の中央部の山すその北側を通しています。一方、万場ため池から田原湾干拓地と、石神から福江湾干拓

●事業計画に見る計画受益地面積の推移



(『豊川用水技術誌』から作成)

地へ延びる水路も描かれています。

用水の灌漑期間も6月21日から9月30日まで設定されているなど、米の増産計画が中心でした。

計画は戦時体制により立ち消えになりましたが、終戦後に『豊川農業水利事業計画』として復活しました。宇連ダムの水を渥美半島だけでなく東三河一帯にも、大野頭首工から東西の幹線水路で通水する計画に変更され、昭和24年から宇連ダム建設

が着手されました。

上のグラフは、豊川用水計画に見る受益地面積の推移です。昭和24年に畑地灌漑が加えられ、佐久間ダムからの分水協定の妥結、大野頭首工のかさ上げなど施設の強化により、昭和33年には受益地を拡大し、畑地灌漑の比重が高まっています。そして、昭和42年には田原湾干拓が除外されました。

豊川用水計画は、戦前の干拓新田開発と水田灌漑を目的としたものから、ファームポンドとスプリンクラーによる畑地への周年灌漑という方針転換により、渥美郡の農業は発展の機会を得たのです。

(執筆委員・藤城信幸)

今月の「表紙」

▼ピカピカのランドセルを背負った新一年生は、期待と不安に胸をふくらませ桜の木の下を駆けまわりました。満開の桜が子どもたちを祝福しているようでした。だれでも最初は一年生。大人になっても人から教えるもったことを大切にしていきたいです。(〇)

【表紙の写真】清谷川の桜並木と新一年生